

螺 髪 考

螺髪とは仏像の頭上に現れている右巻きの髪形を指して言う名称である。具体的に言えば仏像の頭上を彫刻する際、髪をもつて螺のような髪形を造り、仏陀が普通の人間と異なつた相好をしていることを示すために始まつたものと思われ。それ故に仏像と螺髪とは切り離すことのできない密接な連関性を有するのである。

しかし、仏像を中心に信仰が始まつてから後、様々な地域で製作されている仏像を観察してみると、仏像を造る仏師たちの間には或る一定の決つた仏陀観というものを持つていなかったようである。何となれば顔形、衣、螺髪等が地域と時代によつて異なつた形の仏像を造り出しているからである。

したがつて、それによつて分かることは、一に仏像を中心とした自由な信仰が行われていたこと、二に仏師たちが仏像を造る際、教団からなんの制約も受けていなかったこと、三には螺髪を巡つての解釈において地域的、時代的に異なっていること、など仏像をめぐるいくつかの問題点が指摘され

るのである。

さて、本稿では印度での仏像製作が周辺の国家に伝わり、またそれらの国家においても独自の新しい仏像が製作される過程において、仏像の受容と螺髪とはどのように結びついていたのか、そのことに重点をおいて考察をしようと思う。

(1) マトゥラーの仏像

仏教の歴史上、いつ頃仏像が出現し、またどこで造り始めたのか、未だ論争が収まらず未解決の章として残っている。しかし現存するマトゥラーの仏像を中心に調べると、最初期の仏像と思われるものはおよそ紀元二世紀前後のものとすることにほぼ間違いないと思われる。

そこで、マトゥラーの仏像を中心に頭上の形を考察すると次の如くである。

- 一、螺髻の形式
- 二、螺髪の形式
- 三、僧頭の形式

金 炳 悟

これをさらに時代的に分類すると螺髻の形式は初期仏像の髪形と推定され得る。その理由は現存するマトゥラー仏像の中で螺髻の髪形をしている仏像は年代的に三・四世紀を下る時期の製作がほとんど見られず、初期の仏像と思われる二・三世紀の仏像に限ってその形式が残っているからである。

次に螺髻と僧頭の形式であるが、それは後の仏像にも伝承され大いに影響を及ぼしている。しかし螺髻の形式と僧頭の形式を比較してどちらが先に造られたものであろうかという問題になると、現存する仏像では速断ができない。それはマトゥラー博物館所蔵の赤砂岩製の仏像 (No. 00. A. 4) で見るように、僧頭の形式が造られたこともかなり早い時期であったことが立証されているからである。

三には印度の文化圏を中心とした螺髻に関する概念の問題であるが、現在我々が考えているように螺髻、即ち仏像という相依的な觀念から理解されたものではなく、後の時代六世紀頃になると髪飾りの一つとして理解されていたことが観音菩薩像や貴婦人の頭像等により示されているのである。

(2) ガンダーラの仏像

仏像の発生地と言われているガンダーラの仏像を中心に頭上の形を検討すると、マトゥラー仏像に比較してそのつくり方及び文化的な背景は全く異質な面がある。

特に仏像の髪形を以て考察した場合、どうみても印度的な

要素は見当たらない。そうかと言ってファガッソン (J. Ferguson) が主張するローマ式と見るのも行き過ぎである。しかし周辺の彫刻と無理に関連させる場合、ギリシア式に類すると言えよう。

したがって、ガンダーラ仏像は周辺の仏教圏にも大いに影響を与えているが、髪形から見ると限りガンダーラ文化圏を越えて他の国まで影響を及ぼした形跡はさほど見られないのである。以上の観点からガンダーラ仏像の頭上を分類すると次の如く大別される。

一、火焰が燃え上がるような髪形

二、波状形の形式

三、螺髻の形式

四、線彫りの形式

かかる四つの形をまた年代的に考察すると、初期ガンダーラ仏像は火焰が燃え上がるような髪形に統一されていたのであるが、時代が下ると共に仏像の形式にも変動が現われ、五世紀頃になると二、三、四のような自由な髪形に変わっていくのである。

しかし、ガンダーラ仏像にマトゥラー式の螺髻が現れるのはギメ美術館所蔵の石造菩薩像 (MG 18915) でみるように三世紀頃にはその影響を受けていることが窺われるのである。

(3) 中国の仏像

中国に仏教が伝わった年代については諸説があるが、現在の定説は後漢明帝（28～75年）の時とされている。当然その

時代には印度とガンダーラ地方では仏像が普及し始まった頃であるから中国に伝わった仏教の中には既に仏像そのものが伝えられたように思われるが現存するものは見当たらない。

したがって、中国仏像を中心に螺髪を受容とその変遷について研究する場合、なお三百年ほど後の時代、即ち北魏前後に至るまで待たねばならないのである。その故に中国における螺髪の考察は北魏を前後にして盛唐時代までの多様な仏像をその対象として選ぶのが妥当である。以上の観点から中国仏像に現われている螺髪の形を纏めると次の如くである。

一、金銅仏を中心に櫛をかけたような形式

二、僧頭の形式

三、渦巻紋の形式

四、螺髪（金）の形式

しかしかかる四つの髪形をみるといずれも中国の独創的な様式とは言えないが、仏像が中国的な特色を増すに加えて頭髪における変化も著しくなっている。

例えば東魏仏像（京都藤井有鄰館藏天平二年銘弥勒仏立像）の渦巻紋の頭髪を見るとその源はガンダーラ波状形の伝承であるが、しかし中国伝統の紋様を取り入れ中国的な特徴が濃くなっていることは言えるであろう。

結論

以上三つの地域を中心に仏像の螺髪を典型的に分類したが、これに基づいて結論を出す次の如く言えるであろう。

頭髪の形態…仏像に現われている髪形を考察すると、印度のマトゥラー仏では螺髻、螺髪、僧頭の三つの形が紀元二世紀を前後して現われていたようである。しかしガンダーラ仏像でみるような波状形の髪形は一切みられない。

またガンダーラ仏においても最初の段階では波状形一本化に統一されていたことを証明している。さらにこのような様式がガンダーラ仏像の最盛期を過ぎた段階で螺髪の形式と線彫りの形式が現われたのである。

螺髪（金）の受容…螺髪と仏像が結びつくのはマトゥラー仏像が初めである。これ以前に螺の形をした髪飾りは仏像を除いて全くみられなかった。しかしこれが後の時代になると印度、ガンダーラ、西域地方では仏像のみならず、菩薩、貴婦人、供養者像などにも表現されている。しかし中国においては仏像以外に結びつくところは一切見られないのである。

斯く考察すると、当時厳しい戒律を以て統制されていた教団の中で仏像のみは何等の規定もなく自由に製作され、かつ信仰を広げたことは興味深いことと言えるであろう。

△キーンワード▽ 仏像、螺髪

（仏教大学大学院）